群教セ	G02 － 02
	令 2.275 集
	社会－小

社会的事象を関連付け、社会への関わり方について思考を深めることができる児童の育成

――単元のまとめる過程における、フローチャートを活用した再構成の活動を通して――

特別研修員　大竹　宏道

Ⅰ　研究テーマ設定の理由

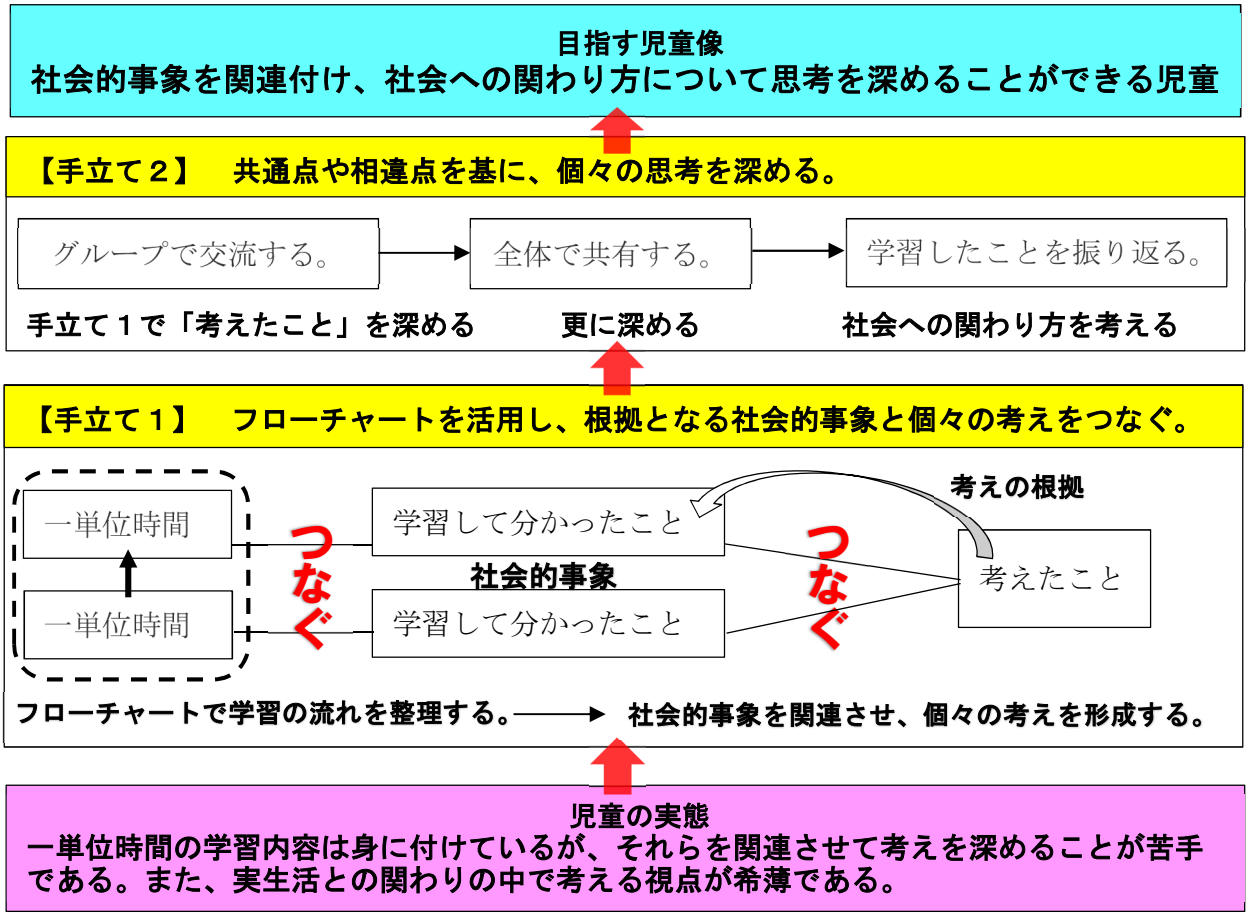
平成28年12月の中央教育審議会答申では、「社会的事象の特色や相互の関連、意味を多角的に考える力」及び「思考・判断したことを適切に表現する力」を養うことと示されている。これは児童生徒が、課題の解決に向けて資料を活用し様々な視点から調べ、それぞれがどのように関連しているかを考え、思考を深めたことを表現することで次第に身に付くと考えられる。

本校には、地図帳や統計などの基礎的資料を読み取り、一単位時間の学習事項は理解できる児童も多い。しかし、示された資料を読み取るだけに留まるなど、複数の資料を関連させて、生活との関わりの中で思考を深める過程にまでつなげることができる児童は少ない。それは、追究した複数の情報を関連付けて考えさせる活動や、生活との関わりの中で思考を深めたことを表現する活動が、不十分であるからだと考えられる。

そこで、単元のまとめる過程において、毎時間の学習事項を基に、複数の社会的事象を関連させながら社会への関わり方について、思考を深める活動を取り入れることが必要であると考え、上記の通りテーマを設定した。

Ⅱ　研究内容

１　研究構想図



２　授業改善に向けた手立て

一単位時間ごとの学習事項を関連付けて思考を深めるために、次のような手立ての実践を試みた。

手立て１

まとめる過程において、各単位時間の流れを整理したフローチャートを活用し、考えと根拠となる社会的事象をつなぐ活動を設定。

手立て２

交流を通して見いだした共通点や相違点を基に、個々の思考を深める活動の設定。

手立て１では、児童は課題追究の場面において、一単位時間ごとに、学習したことをフローチャートに整理していくことで学習の流れが把握できるようにしておく。次に、一単位時間ごとに追究した学習内容を蓄積しておく。そして、単元のまとめる過程において各単位時間で追究し、蓄積してきた社会的事象を根拠として関連付けながら、視点を基に自分の考えを選択・判断し、表現できるようにする。その際に、根拠となる社会的事象と考えをつなぐことで、社会的事象を関連させながら思考を形成している姿を見える化していく。

手立て２では、フローチャートに記述したことをグループで交流し合い、共通点や相違点を見いだすことで、個々の思考を深めていく。さらに、交流を通して深めた考えを終末で振り返らせることで、自身の学習の成果を実感できるようにする。このような活動を通して、思考の深まりが見られるようにしていく(図１)。

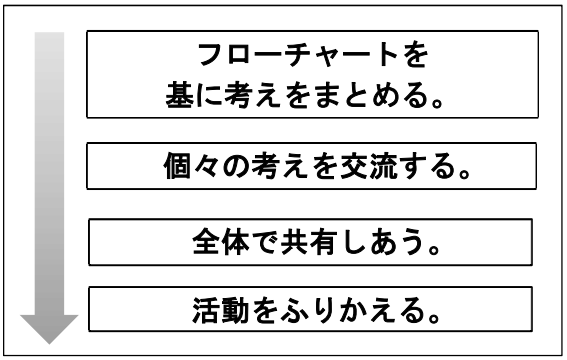


図１　思考の深まりのイメージ

Ⅲ　研究のまとめ

１　成果

○　「学習の流れ」と「学習して分かったこと」をフローチャート式にして整理したため、児童は前時までの既習事項と次時の学習を関連させながら、毎時間の活動に取り組むことができていた。

○　フローチャートに学習内容を整理してきたため、児童はどんな学習をしてきたのか視覚的に把握しやすくなり、蓄積されてきた情報を根拠に考えを形成することができた。

○　各単位時間の社会的事象を関連付けながら考えを形成する活動を通して、既習の知識を再構成することができた。

○　視点を基にした交流を通して、新しい考えに触れることができたことで、自分だけの考えに捉われることなく、思考の深まりを実感できていた。

２　課題

○　学習内容を、そのまま自分の考えに置き換えてしまうなど、社会への関わり方について、個々の考えを形成するまでに至らなかった児童が見られた。児童の中で、考えたことが生活体験と結び付いていなかったり、問題意識が不十分であったりしたためだと考えられる。毎時間、単元を貫く学習問題を基に、各単位時間のつながりのもと、単元のゴールに向かう道筋を明確に示していくことで、学習に向かう個々の目的意識をもたせて取り組んでいくことが必要であると考えられる。

○ 個々の考えを紹介し合うだけに留まり、思考を深める段階にまで至らなかったグループも見られた。個々の考えに対して、質問や感想を伝え合う活動を取り入れることも必要であると考えられる。

実践例

１　単元名　「情報産業とわたしたちのくらし」（第５学年・２学期）

２　本単元について

本単元は、我が国の産業と情報との関わりについて、放送などの情報産業で働く人々の情報を集め発信するまでの工夫や努力などに着目して、聞き取り調査をしたり、映像や新聞、インターネットなどの各種資料で調べたりして、まとめ、表現する活動を通して、放送などの情報産業は、国民生活に大きな役割を果たしていることを理解させるものである。まず、ニュース番組の映像資料を見せたり、児童の生活体験を想起させたりすることで、「ニュース番組はどのようにつくられているのか」といった課題意識をもたせる。学習計画を立てていく中で、「どのように情報は集められているのか」「集めた情報はどのようにして伝えているのか」「見る人はどのように情報を活用するとよいのか」といった視点をもたせ、学習問題を追究していく。

以上のような考えから、本題材では以下のような指導計画を構想し実践した。

目標	情報産業とわたしたちのくらしの学習を通して次の事項を身に付けることができるよう指導する。 ア 我が国の産業と情報との関わりについて、放送などの情報産業で働く人々の情報を集め発信するまでの工夫や努力などに着目して、聞き取り調査、映像、新聞、インターネットなどの各種資料で調べ、まとめることを通して、放送などの情報産業は、国民生活に大きな役割を果たしていることを理解する。（知識及び技能） イ 我が国の産業と情報との関わりについて、まとめたことを基に、放送などの情報産業の様子を捉え、それらの産業が国民生活に果たす役割を考え、表現する。（思考力・判断力・表現力等） ウ 我が国の産業と情報との関わりについて、主体的に問題解決しようとしたり、よりよい社会生活を考え、学習したことを社会生活に生かそうとしたりする。 （学びに向かう力、人間性等）
評価規準	(1) 放送などの情報産業について、調べたことを図表や文などにまとめ、放送などの情報産業は、国民生活に大きな役割を果たしていることを理解している。 (2) 我が国の産業と情報との関わりについて、学習したことを基に放送などの情報産業の様子を捉え、それらの産業が国民生活に果たす役割を考え、発信される情報と自分たちの生活を関連付けて表現している。 (3) 我が国の産業と情報との関わりについて、主体的に問題解決しようとしたり、よりよい社会生活を考え、学習したことを社会生活に生かそうとしたりしている。

過程	時間	主な学習活動
つかむ	第１時	・ニュース番組を視聴することを通して、ニュース番組が伝えている情報の種類や放送内容について話し合うことができるようにする。
	第２時	・放送局の工夫について、疑問をもとに学習問題をつくる活動を通して、予想を出し合い、学習計画を立てることができるようにする。
追究する	第３時	・放送局のホームページやニュース番組をつくる佐藤さんの話などから情報を集める活動を通して、放送局の情報の集め方について理解できるようにする。
	第４時	・番組づくりに携わる人たちの話などから情報を集める活動を通して、情報を伝えるための工夫や努力について理解できるようにする。
	第５時	・テレビなどの情報が、人々の行動を決めるきっかけとなったり、報道被害や社会の混乱を起こしたりすることがあるなど、影響を与える面があることについて考え適切に表現できるようにする。
まとめる	第６時	・情報産業と国民生活の関わりについて、フローチャートに整理した内容と、思考を関連付ける活動を通して、ニュース番組で届けられる情報の生かし方について、考えたことを表現できるようにする。

３　本時及び具体化した手立てについて

本時は全６時間計画の第６時に当たる。ここでは、単元の学習課題「放送局の人々は、どのようにしてわたしたちに情報を届けているのか調べ、情報の生かし方について考えをもとう」を基に、複数の社会的事象を関連させながら思考を深める学習を進めるために、次のような手立てを設定し試みた。

手立て１　「放送局の人々は、どのようにしてわたしたちに情報を届けているのか」という問いをまとめる過程において、各単位時間の流れを整理したフローチャートを活用し、「情報を生かしていくためにできること」という考えと、根拠となる社会的事象をつなぐ。

手立て２　「情報を生かしていくためにできること」という考えを交流し合い、見いだした共通点や相違点を基に、個々の思考を深める。

４　授業の実際

(1)　各単位時間の流れを整理したフローチャートを活用し、考えと根拠をつなぐ活動。

本単元の第１・２時では、ニュース番組の視聴を通して、日ごろの放送から得られる情報と自分たちの関わり方について考えさせ、自分事として捉えさせた。これからもニュースをはじめとした放送局から届けられる情報を取り入れながら生活していくことを自覚させ、そのためには、「放送局からどんな情報が届けられるのか」「放送局から届けられる情報とどのように関わっていけばよいのか」といった視点を与えることで、学習へ取り組むことへの必要感をもたせた。

第３・４時では、つかむ過程でもたせた「放送局からどんな情報が届けられるのか」という視点に着目させながら、放送局では「見る人が求める(役立つ)情報を届けている」「短い時間で正確に分かりやすく伝えている」「人権や公正・公平な情報を届けている」ことをつかませた。学習の中で「分かったこと」は、児童と確認しながら、キーワードなどでフローチャートに記入させていった。

第５時では、「どのように関わっていけばよいのか」という視点につながるよう、「テレビ放送の影響」について考えていった。テレビから放送される情報は、「災害などの時に、人々の行動を決めるきっかけになることがある」というよさもあるが、一方で、「報道被害などで社会が混乱することもある」といった問題点も抱えていることを捉えさせることで、多面的に考えさせていくようにした。

第６時(本時)では、本時の課題として、情報の生かし方について考えたことを記述し、フローチャートに整理してきた各単位時間の学習内容を根拠にすることを確認した。そして、考えと根拠(学習内容)が明確になるよう、ワークシートに記述した考えと根拠をつなぐよう伝えた。児童は、前単元でも同様の学習を行っていることから、比較的容易に記述することができていた(図２)。情報を生かしていくために「役立てていく」「気を付けていくこと」「分かったこと」という視点を与えたことにより、複数の視点で記述している児童が多く見られた。また、一つの学習内容だけでなく、二つの学習内容を根拠に記述するよう促すと、複数の事象を関連させながら考えをもつことのできる児童も見られた(図３)。

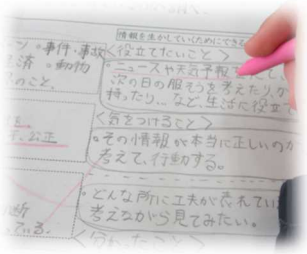


図2　考えと根拠をつなぐ

【役立てていきたいこと】
・ニュースは、短い時間で正確に伝えてくれるので、忙しい朝に見るようにしたい。
・災害などの報道があれば、被害の大きさなどを知り、募金などをしたい。
【気を付けていきたいこと】
・これからは、ニュースなどがどのように編集されているのか気を付けて見ていきたい。
・報道被害などがあり、社会が混乱してしまうこともあるので、よく確かめてから行動したい。

図３　フローチャートに記述した考えの一例

(2)　交流を通して見いだした共通点や相違点を基に、個々の思考を深める活動。

本時の後半では、フローチャートに記述した考えをグループごとに交流しあう活動を設定していった(図４)。友達の意見との相違点に着目させていく中であるグループに目を向けると、「テレビによる報道は人々の行動のきっかけになる」という学習内容から、「その情報が本当に正しいのか確かめて行動したい」と記述した児童は、友達の「災害などの報道があれば、被害の大きさなどを知り、募金などをしたい」という考えを聞き、「そういう見方はできなかった」と感心し、その後の全体発表で紹介していた。

図4　グループごとに交流

その後の全体発表では、グループごとに共通した考えや、異なった考えの中で特に納得できたものに焦点化し、紹介し合った(図５)。学習後の振り返りでは、「スポーツ番組は見て楽しむものだけだと思っていたけど、友達の『選手のプレーを自分に生かしていく』という考えを聞いて、なるほどと思った」「友達の意見で『バラエティ番組を楽しんでいる』という意見を聞いて、確かに自分も楽しんでいるなと気付いた」といった意見や、「自分も発表しているときに間違ってしまうから、アナウンサーの人も間違ってしまわないように気を付けていることが分かった」など情報を伝える立場になって考えている意見が見られた。このように、交流を通して社会への関わり方について、自分の考えを更に深めている姿が見られた(図６)。

図5　考えを紹介し合う

・スポーツ番組は見て楽しむものだけだと思っていたけど、友達の『選手のプレーを自分に生かしていく』という考えを聞いて、なるほどと思った。
・みんな、自分が書いていない「気を付けること」について、たくさん書いていた。自分も○○さんのように、「テレビの問題点を広めない」ことが大事だと思った。
・始めは、ニュース番組は正しい情報だけを放送しているのかと思ったけど、時にはまちがった情報を放送していると知って、驚いた。

図６　フローチャートに記述した振り返りの一例

５　考察

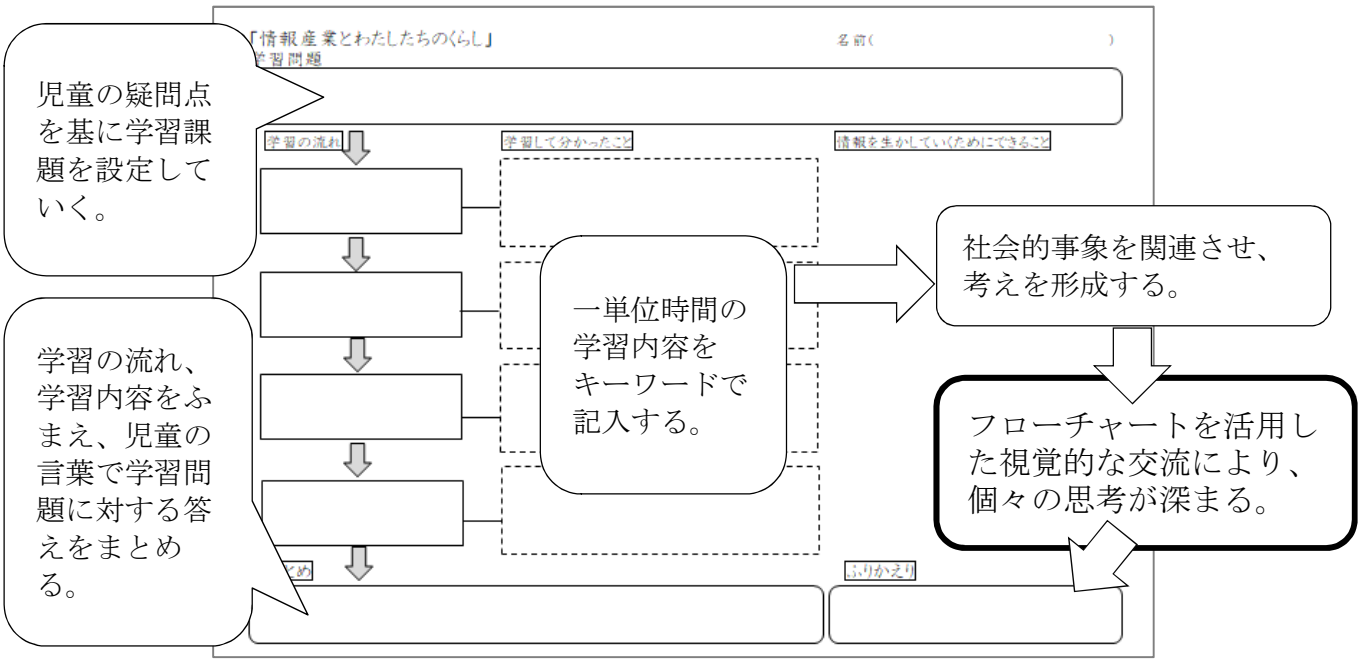
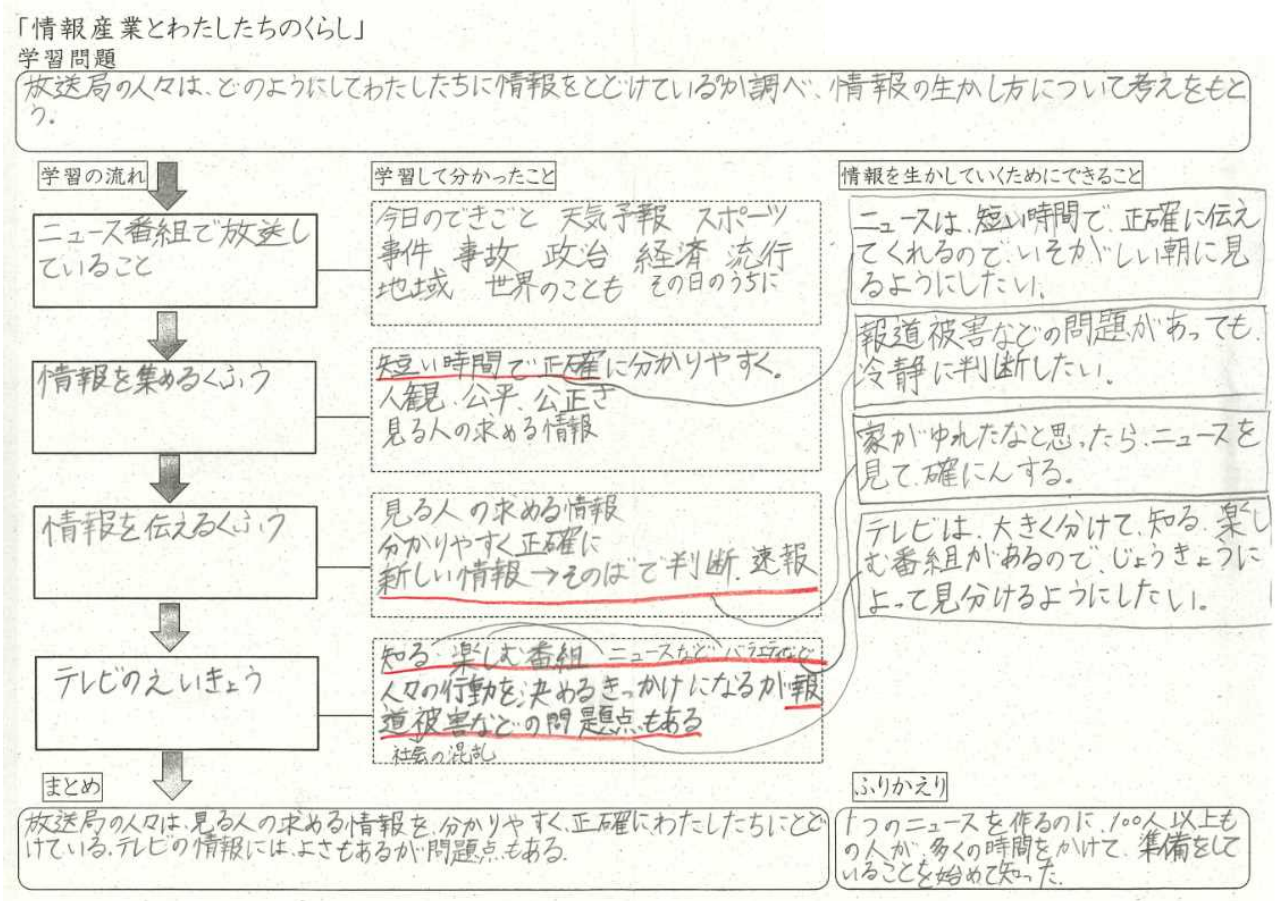
手立て１として、はじめに、児童の生活体験と関わらせながら課題意識をもたせ、学習課題を立てた。次に、単元のゴールとして、考えをもつ活動を設定した。考えをもつためには、基礎知識を身に付けることが必要なため、児童は毎時間の学習に目的意識をもって取り組むことができた。その結果、単元のまとめる過程において、児童は自分事に置き換えながら主体的に学習課題の解決に向かうことができた。その際に、フローチャートに記述してきた学習内容の積み重ねがあったため、児童は知識を再構成しながら考えを形成することができた。

手立て２として、本時においては考えを形成した後に、視点を明確にした交流活動を取り入れたことで、活動前の思考をさらに深め、学びを実感し、全体交流で紹介し合うことができた。獲得した社会的事象に大きな差異はなくとも、児童によって生活体験も異なることから、交流し合うことは、個々の思考を深める上で有効な手立てであったと考えられる。

一方で、第５時で放送局が伝える情報のよさと問題点について捉えさせることで、第６時において、放送局が伝える情報のよさを認識しつつ、抱える問題点について、今後情報と関わる上で、個々が多面的に選択・判断することに期待したが、児童のワークシートの記述を見ると、学習内容をそのまま自分の考えに置き換えている児童も見られた。児童一人一人が、実感を基に選択・判断できるようにするためには、情報との関わり方を本単元のみの学習にとどまらず、生活の仕方とも関わらせながら継続的に考えさせていくことが必要である。今後も、社会生活の様々な場面で多面的に考えたり、公正に判断したりする力が、日常生活の中において発揮されるよう、指導の工夫をしていくことが求められる。

６　資料

資料１　「考えと根拠をつなぐフローチャート」



資料２　「児童の記述したワークシート」